

〈鶴岡工業高等専門学校&高専技術振興会タイアップ企画〉

新春座談会
2026

地元で働き、暮らすという選択 Uターンした若い世代のリアル ～鶴岡高専卒業生の場合～

小、若い世代の地元離れが地域課題となつていて、進学や就職で地元を離れて暮らす若者が増加している現状はあるものの、中には、郷里への愛着や回帰意識を持つてUターンし、培つた職能や経験を生かして活躍している人も多い。2026年の座談会では、鶴岡工業高等専門学校の卒業生で地元就職やリターンを選んだ方々を招き、職業選択や就職活動の体験、地元回帰の経緯、郷里での暮らしの魅力などを語り合つていただいた。出席者は、機械工学科（現・機械コース）卒の石井智久さん（石井製作所代表取締役）、制御情報工学科（現・情報コース）卒の原田あすかさん（鶴岡高砂製作所）、物質工学科（現・化学・生物コース）卒の佐々木伸啓さん（エルメクテス）、電気電子工学科（現・電気・電子コース）卒の佐藤智也さん（鶴岡高専助教）、鶴岡高専創造工学科教授で地域連携センター長の斎藤菜摘さん（順不同）。前半の話題は、鶴岡高専を選んだきっかけと学び、就職活動の体験など。



いしいともき
石井智久さん

1988年酒田市生まれ。2009年に鶴岡高専機械工学科（現・機械コース）を卒業。11年に長岡技術科学大学環境システム工学科を卒業。13年に同大環境システム工学科の修士課程を修了。同年、農業機械の開発販売を手掛ける企業・石井製作所に入社。15年6月から代表取締役

農機開発と事業支援に注力

ーそれぞれ自己紹介をお願いします

石井 私は酒田市の新堀といふところに生まれました。鶴岡高専では、機械の設計や工学を学び、流体力学を研究しました。長岡技術科学大学・大学院では環境システムを専攻。農家さんたちと一緒に農業分野で技術研究を4年間させていただきました。石井製作所は農業機械のメーカー

ーで、僕は4代目の跡取り。代表なので経営がメインですね。農業系のいわゆる商用化技術というところで、新しい直蒔きや密苗といった技術を開発したり、地元の企業さんと連携して農機を作ったり。最近は農林水産省のスタートアップメンターという仕事をしており、地域内外で農業系ベンチャーの立ち上げや事業再生の支援に、自分の事業と

並行して取り組んでいます。佐々木 私は、医薬品や医療機器の製造販売をしている日東電工の東北事業所に就職。品質保証の部門で勤め、4年ほど前に実家に戻つきました。今まで培つてきた経験を生かし、エルメクテスに在籍。品質保証関連の業務を担つています。エルメクテスは、大豆や小麦粉などを代替する食品原料として納豆菌から作つたタンパク質や加工食品を開発生産しているスタートアップ企業です。パン、クッキー、麺などがあり、小麦粉の一部を代替するパターンもありますし、100%を代替するのもあります。大阪万博にも参加しまし

鶴岡工業高等専門学校

1963年に創立された国立の高等教育機関。確かな技能を求める工業系技術者、高度化・ハイテク化していく科学系分野で活躍できる人材を養成し、地域内外に輩出している。基礎と専門的な実践技術を身に付ける5年間の本科、発展的に学んで大学修了と同レベルの技術者教育を受ける2年間の専攻科を開設。本科では、1年次は創造工学科に所属し、2年次に機械、電気・電子、情報、化学・生物の4コースから選択して学ぶ（2017年度に機械工学科、電気電子工学科、制御情報工学科、物質工学科より改組）。25年度には新たにデジタルデザインコースが開設された。専攻科には機械・制御、電気電子・情報、応用化学の3コースを設けている



ささき のぶひろ
佐々木 伸啓さん

1995年鶴岡市生まれ。2016年に鶴岡高専物質工学科(現・生物・化学コース)を卒業。18年に同専攻科の応用化学コースを修了。同年に日東電工株式会社に入社し品質保証部門に配属。22年にフェルメクテス株式会社に入社し生産管理や品質保証の体制構築に携わっている

納豆菌粉で食糧課題に挑む

鶴岡高砂製作所は、電気自動車などの開発段階で使われる試験・評価用電源装置を手がけています。電気自動車を取り巻く環境は変化が大きく、将来の方向性が注目されている分野です。当社はその中で実用化に欠かせない検証やテストを支える立場として関わり、安全性や性能を確認

8年に卒業して本田技研工業株式会社に入社しました。配属は静岡県の浜松。生産管理の部門で4年半ほど働き、結婚を機に退職しました。以前から関東での生活を経験してみたいという思いがあり、半年ほど東京で生活したのち、鶴岡に戻りました。昨年10月に鶴岡高砂製作所に入社し、現在に至ります。

原田 私は本科を2011年に卒業して本田技研工業株式会社に入社しました。配属は静岡県の浜松。生産管理の部門で4年半ほど働き、結婚を機に退職しました。以前から関東での生活を経験してみたいという思いがあり、半年ほど東京で生活したのち、鶴岡に戻りました。昨年10月に鶴岡高砂製作所に入社し、現在に至ります。

て、弊社で作ったフィナンシエという焼き菓子をサンプル提供。アレルギーのある方への対応の可能性という部分でも好評をいただきました。

原田 私は本科を2011年に卒業して本田技研工業株式会社に入社しました。配属は静岡県の浜松。生産管理の部門で4年半ほど働き、結婚を機に退職しました。以前から関東での生活を経験してみたいという思いがあり、半年ほど東京で生活したのち、鶴岡に戻りました。昨年10月に鶴岡高砂製作所に入社し、現在に至ります。

佐藤 電気電子工学科に2009年に入学し、専攻科では燃料電池の作動温度の低温化に向けた研究を行いました。東京工業大学(現・東京科学大学)に進学し、圧電体材料の結晶構造解析をテーマに研究。その後、就活を経てJR東日本の総合職として入社しました。今年4月から母校である鶴岡高専の教員として働いています。新卒採用や若手育成を担当する部署での経験は、教育という面で今につながっています。

斎藤 私は出身が群馬県です。大学の薬学部を卒業し、薬剤師の資格を取得。就職氷河期の中で就活に苦戦していたところ、大学で所属していた研究室で助手として働くチャンスを得ました。大学院に

自動車産業に関わりたい



はらだ あすか
原田あすかさん

1998年酒田市生まれ。2018年に鶴岡高専制御情報工学科(現・情報コース)を卒業。同年~22年まで本田技研工業株式会社に在籍し生産管理業務。24年に鶴岡高砂製作所に入社し、生産管理部に配属

けや理由を教えてください
佐々木 私の場合は中学3年生の時、高校の説明会で初めて知りました。話を聞くと理系に関するところを深く学べるということで、自分の中では理科系が好きな分野で、

原田 私は入学してから特殊なタイプだったと気付いたんですけれども。中学の時から自動車業界で自動運転などの研究開発をしたいという気持ちがありました。それに一番近いのはどこなんだろうなと思つた時に、普通高校よりも高専に行って就職という道の方がいいのかなと考えました。実際に近道だったかどうかはさておき、それが一番最初のきっかけでした。あと、寮があつたこと。私も酒田出身なもので、寮生活ができるのがかなり魅力的でした。さらに言えば、女子の制服がかわいいと感じましたね。

反対に文系は苦手だったのですが文系科目には苦手意識がありました。親が電気関係の仕事をしているというところもあり、高専を選択しました。

佐藤 私もです。歴史などを進学、在籍しながらくば市の食品総合研究所で支援研究員として研究をして博士の学位を取得。その後、慶應義塾大学先端生命科学研究所の特任教員として鶴岡に赴任し、10年間研究と教育に携わりました。そこでいろいろな人とつながつていると思います。自分ができて現在に至ります。

私の研究の専門は微生物です。環境微生物を分離する技術や、それを利用する技術を学生と一緒に作ろうとしています。見つけた微生物を農業や食品などの産業分野に利用できるようにしたいので、企業や大学と共同研究しながら社会実装を目指しています。

佐々木 鶴岡高専を選んだきっかけや理由を教えてください
佐々木 私の場合は中学3年生の時、高校の説明会で初めて知りました。話を聞くと理系に関するところを深く学べるということで、自分の中では理科系が好きな分野で、

総合職経験生かし教職へ



さとうともや
佐藤智也さん

1994年鶴岡市生まれ。2014年に鶴岡高専電気電子工学科(現・電気・電子コース)を卒業。16年に専攻科の同機械電気システム工学コースを修了。18年東京工業大学(現・東京科学大学)物質理工学院材料系を修了。同時に東日本旅客鉄道株式会社に入社。秋田車両センター、奥羽本線・田沢湖線の車掌、若手社員の育成などを担当。25年に鶴岡高専創造工学科の電気・電子コース助教に着任

石井 寮の存在は私にとって大きかったです。小さい頃から「石井製作所の跡継ぎ」という看板を背負つてい

て、そういう見られ方や扱いを感じてきたことで、自分自身の価値がよく分からずになりました。あと、中学の時に人間関係で悩んだこともあって、そこで周りの友達が行かない学校を選びたい、親元を離れたい、と。自分の力で生きるというか、周りを気にせずにトライできる環境だと思ったのが高専だったんです。

斎藤 高専と、高校や大学とではどんな違いを感じましたか？

石井 進学校と比べた場合、大学受験やセンター試験、今は共通テストですか、それがなくて。もちろん何かに追われるから頑張れるつていうところもありますけれどもそれ以上に、5年間で腰を据えて何か興味のあることに取り組めるっていうのは良かつたと思いますね。大学受験

原田 大学受験のためだけに知識を蓄えるのではなく、いろいろな実験や経験ができる自由さでしようか。もちろん授業のレポートや提出物は常にあるんですけども、日常的に何か楽しめる環境があるのがすごくいいところだったかな。私は学生会に入つて他の高専と交流したりもしました。東北の各高専出身の友人がいて、今でも集まつたりつながりが続いています。

佐々木 他の高校の友達からよく聞くのは設備のことです。実際に社会で使う機材や機器があって、触れる機会が多いのは、他と違うのかなと感じます。私は前職で業務に入るために、設備機器に関する基本的な知識があると、業務の理解の速さや進め方がだいぶ違うことを実感しました。

斎藤 高専では、4年生の後期から研究活動が始まります。大学1年生と同等の年代になります。研究活動の中で自分で考えなければならず、データ整理やプレゼンテーションの機会も多くなります。5年生や専攻科では学術学会で発表するチャンスもありますが、準備はとても大変です。研究を早い段階から始

はないけど、専攻科があるので行きたい人は他大学や大学院に編入学もできるのは強みだと思います。

原田 私は専攻科には進んでいないのでそんなに深い研究はしてないんですが、それ高専の特徴だと思います。

原田 私は専攻科には進んでいないのでそんなに深い研究はしてないんですが、それ高専の特徴だと思います。

員は研究者があるので、大型の外部研究資金を獲得して設置した特殊な専門的機器があります。これは高校と大きく違うところ。学生が卒業研究で受託研究に参画したり、地域課題をテーマとした研究を通じて地域と関わることも高専の特徴だと思います。

原田 私は専攻科には進んでいないのでそんなに深い研究はしてないんですが、それ高専の特徴だと思います。

佐藤 私は、高専の頃から就職はほとんど考えていました。高専は就職に強いというイメージを持たれます。同時に高い専門性や幅広い経験を得ることができます。就職は聞かせてください。

佐藤 私は、高専の頃から就職はほとんど考えていました。高専は就職に強いというイメージを持たれます。同時に高い専門性や幅広い経験を得ることができます。就職は聞かせてください。

めることが学生の成長を促していると感じます。

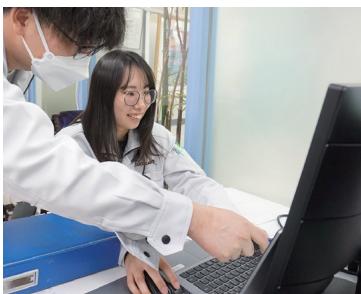
——高専は高い就職・進学率、安定した進路に定評があります。職業選択、就職活動の体験を聞かせてください。

佐藤 私は、高専の頃から就職はほとんど考えていました。高専は就職に強いというイメージを持たれます。同時に高い専門性や幅広い経験を得ることができます。就職は聞かせてください。

特 集



農機展示会にて。秋田で海外農機を扱う商社の担当者と共に



普段はデスクワークが中心。でも現場で何かあればいつでも駆けつけます



納豆菌粉末の委託生産にあたり
海外への出張もある。任されたり
企業訪問した時には責任の重
さを感じる

会社とともに私自身も成長できるフィールドが整っていると感じたことから最終的にJR東日本に決めました。

佐々木 私は、求人票で興味があるところを片つ端から集めて、あまり地元から遠く離れたくないなと思いながらみていました。学んできたことを生かせる仕事、生物学寄りの物質工学に何かの形で関わる企業がいいなど、ふわっとした感覚で探しました。

斎藤 指導教員だった立場から申し上げると、佐々木さんは就職活動に割と苦労していました。というのも専攻科には、ものすごくたくさんの求人をいただいているんです。昨年だと726社からいただけ、求人倍率は52倍でした。自分がどういう仕事をしたいのか、「絶対ここがいい」という信念のようなものがないと、求人の中からどうやって、何を決め手に選んだ

らしいのか分からなくなつてしまふのです。

石井 私の場合、家業を継ぐということは自覚していました。なので高専を通じて、職人として生きることができます。なんたと自信がつきまいた。専攻科と大学院では、農業と経営の勉強をしながら事業化をいろいろ実践しましたね。大学寮えたり図面を描けたり。大学と大学院では、農業と経営の中で家電修理を請け負つたら、部品の調達が大変で儲からないとか、自動車が欲しい留学生たちに通訳しながら購入を仲介してみたり。何を言いたいかというと、問題解決



さいとう なつみ
斎藤 菜摘 さん

群馬県出身。1996年に東邦大学薬学部薬学科を卒業。2003年に同大学院薬学研究科博士課程を修了。同年に慶應義塾大学・先端生命科学研究所特任教員。13年に鶴岡高専物質工学科准教授。24年に同創造工学科教授。25年から副校長、地域連携センター長、研究テーマは環境の未培養微生物の探索、食品主原料として利用可能な「納豆菌粉」の開発

だと思います。

原田 就職の時期に張り出された求人票に私が入りたい会社はありませんでした。きっと高専には求人が来ない分野や業種、職種があります。そこで私は研究室の先生に「この会社に入りたいんですけど、どうしたらいいですか?」と尋ねました。そうしたら求人出してもらえるよう掛け合つてくれて。それで無事に応募できました。先生の協力はかなり重要なこと。

高専は就職率100%と言われており、実際に求人も多く寄せられます。卒業までに全員が内定を得られるという意味では心強い環境ですが、必ずしも第一志望の内定が100%というわけではありません。希望どおりの進路を実現するためには、学校推薦があるからと安心しそぎず、自分自身でしっかりと準備することも大切です。学校推薦の1社の選考が長かつたりしても落ちてしまつたら、2社目を探す時には数が減つているでしょう。私も選考結果が出るのが遅かつたので、落ちたらどうしようつて不安に思ってから待つてましたね。

〔次号につづく〕

新春座談会
2026

地元で働き、暮らすという選択 Uターンした若い世代のリアル ～鶴岡高専卒業生の場合～（下）

この立場になつて気付いたことは、本校の学生が地域の特徴、例えば文化でも産業でも住んでいる地域を自慢することです。知らないというよ

うに貢献する場をつくること

が地域連携センターの役割です。

—地域連携センターについて紹介をお願いします

斎藤 鶴岡高専の地域連携センターや

ーでは、本校の研究シーズを生かした研究協力や技術支援、技術相談、科学技術教育の推進に取り組んでいます。地元企業や自治体、地域の団体などと協力したさまざま

新規事業の創出に挑戦を



いしい ともき
石井 智久 さん

1988年酒田市生まれ。2009年に鶴岡高専機械工学科（現・機械コース）を卒業。11年に長岡技術科学大学環境システム工学科を卒業。13年に同大環境システム工学科の修士課程を修了。同年、農業機械の開発販売を手掛ける企業・石井製作所に入社。15年6月から代表取締役

工学系高等教育機関・鶴岡工業高等専門学校の卒業生で地元就職やUターンを選んだ方々を招き、仕事や暮らしについて語り合う2026年の新春座談会。前回に続き、意見交換の様子を誌面で紹介する。出席者は、機械工学科（現・機械コース）卒の石井智久さん（石井製作所代表取締役）、制御情報工学科（現・情報コース）卒の原田あすかさん（鶴岡高砂製作所）、物質工学科（現・化学・生物コース）卒の佐々木伸啓さん（フェルメクテス）、電気電子工学科（現・電気・電子コース）卒の佐藤智也さん（鶴岡高専助教）、鶴岡高専創造工学科教授で地域連携センター長の斎藤菜摘さん（順不同）。後半の話題は、Uターンの経緯、地元への意識、今後のビジョンなど。

この立場になつて気付いたことは、本校の学生が地域の特徴、例えば文化でも産業でも住んでいる地域を自慢することです。知らないというよ

うに貢献する場をつくること

が地域連携センターの役割です。

—この立場になつて気付いたことは、本校の学生が地域の

特徴、例えば文化でも産業でも住んでいる地域を自慢することです。知らないとい

うに貢献する場をつくること

が地域連携センターの役割です。

すと県内就職は2割程度でした。ですが、今回お話をしている卒業生のように、県外でたくさんの経験を積んで戻つてくれる人材がいます。大企業での仕事経験、地元から出て生活した経験を通じて、いろいろな物の考え方や見え方が変わつてくるのではないかと思います。

鶴岡高専には庄内地域外や

県外からの学生も多くいて、彼らが卒業後に鶴岡、庄内に就職するUターン人材も増えています。地元以外のことを知り、戻つてきてあらためて鶴岡の良さや課題をどう感じられるのか、ぜひ皆さんに聞いてみたいですね。

—では、Uターンの経緯、地元への意識についてうかがいましょう

佐々木 私の実家は農業を営んでいます。前職の頃も不定期で戻つて手伝いをしていました。4年ほど前に身内の体調が悪いという連絡を受けて、もつと頻繁に手伝つて

この立場になつて気付いたことは、本校の学生が地域の特徴、例えば文化でも産業でも住んでいる地域を自慢することです。知らないとい

うに貢献する場をつくること

が地域連携センターの役割です。

—この立場になつて気付いたことは、本校の学生が地域の

特徴、例えば文化でも産業でも住んでいる地域を自慢することです。知らないとい

うに貢献する場をつくること

が地域連携センターの役割です。

すと県内就職は2割程度でした。ですが、今回お話をしている卒業生のように、県外でたくさんの経験を積んで戻つてくれる人材がいます。大企業での仕事経験、地元から出て生活した経験を通じて、いろいろな物の考え方や見え方が変わつてくるのではないかと思います。

鶴岡高専には庄内地域外や

県外からの学生も多くいて、彼らが卒業後に鶴岡、庄内に就職するUターン人材も増えています。地元以外のことを知り、戻つてきてあらためて鶴岡の良さや課題をどう感じられるのか、ぜひ皆さんに聞いてみたいですね。

—では、Uターンの経緯、地元への意識についてうかがいましょう

佐々木 私の実家は農業を営んでいます。前職の頃も不定期で戻つて手伝いをしていました。4年ほど前に身内の体調が悪いという連絡を受けて、もつと頻繁に手伝つて



ささき のぶひろ
佐々木 伸啓さん

1995年鶴岡市生まれ。2016年に鶴岡高専物質工学科(現・生物・化学コース)を卒業。18年に同専攻科の応用化学コースを修了。同時に日東電工株式会社に入社し品質保証部門に配属。22年にフェルメクテス株式会社に入社し生産管理や品質保証の体制構築に携わっている

学びと経験は若いうちに

石井 私は事業承継というパーカ内にあって、そこで活動していたので認識はしていましたが、鶴岡サイエンスパークで展開されている最先端の研究や事業、企業活動は世界的にも珍しいと思います。

研究から企業活動に移行するスピード感が速く、どんどん技術革新して社会のために貢献できる施設ですね。

どうしても街の規模は小さいですから職種は限られるかな、給料も変わるかなと心配はありました。とはいえ馴染みがある環境ですし、身内も近くにいますし、どうにかなるだらうと考えました。

なるべく多くの話を聞いて、学生時代に所属していた研究室が、鶴岡サイエンスパーク内にあって、そこで活動していたので認識はしていましたが、鶴岡サイエンスパークで展開されている最先端の研究や事業、企業活動は世界的にも珍しいと思います。

ことになりますが、迷いしかありませんでした。父親の体調不良や弱ってきた様子を見て、心の準備はなんなくしました。自分が戻らないと家がダメになるなって思つたんですよ。それが大きな決断だったと思います。

原田 私は、地元就職をしていた交際相手と話し合い鶴岡に戻ることを決めました。



はらだ あすか
原田 あすかさん

1998年酒田市生まれ。2018年に鶴岡高専制御情報工学科(現・情報コース)を卒業。同年~22年まで本田技研工業株式会社に在籍し生産管理業務。24年に鶴岡高砂製作所に入社し、生産管理部に配属

就職活動の時点では地元に戻ることは考えていませんでしたが、人生設計を考える中で、生活環境や家族との距離を含めて検討し、将来について自分なりに折り合いをつけることができました。振り返ることで、一度地元を離れて5年ほどで帰ってきたことは私にとってとても良い選択でした。

帰ってきた結果、やはり住み心地が良いです。10代の頃はあまりにも地元のことが見えていたが、今はもう少し地元暮らしやすさや両親が近くにいることのありがたさを強く感じています。これからを考えると、家族が身近にいる環境は大きな支えだと感じます。

一方で、周囲を見渡すと、Uターンしたくても簡単には決断できない人が多いと感じます。給与や働き方の条件に差があると、地元に戻る選択はどうしても難しくなります。実際、高専時代の同級生にも、県外で働きながら「いずれは地元に戻りたい」と話す人は少なくありません。都

市部との条件面のギャップが縮まればUターンは活性化す

が、そうでなければ慣れ親しんだ地元の方が良いと考える

人間力ある技術者を育成



さとうともや
佐藤智也さん

1994年鶴岡市生まれ。2014年に鶴岡高専電気電子工学科(現・電気・電子コース)を卒業。16年に専攻科の同機械電気システム工学コースを修了。18年東京工業大学(現・東京科学大学)物質理工学院材料系を修了。同年に東日本旅客鉄道株式会社に入社。秋田車両センター、奥羽本線・田沢湖線の車掌、若手社員の育成などを担当。25年に鶴岡高専創造工学科の電気電子コース助教に着任

るのではないでしようか。

佐藤 20代前半の頃には

「地元で就職する」「地元に戻る」というのはほとんど意識していなかつた、というの

が正直なところです。総合職

である以上、基本的に2、3年で転勤があり、転勤先や職責によっては高い頻度で帰

生活、ライフプランなどを考

えるとUターンという選択肢

が現実味を帯びてきました。

一方で、いざ鶴岡高専に戻

るとなった時には不安はある

ました。教員になれば講義や

研究活動もあるので、本当に

今の自分にできるのか?

とも悩みました。ただ、知っ

ている先生方も多いですし、

母校でもあるので思い切って

飛び込んでみようと決意しました。

— 地元に住み、働くという

部分の実感はいかがですか

佐々木 冬の雪ですかね。

私が住んでいた宮城でも降る



さいとう なつみ
斎藤菜摘さん

群馬県出身。1996年に東邦大学薬学部薬学科を卒業。2003年に同大学院薬学研究科博士課程を修了。同時に慶應義塾大学先端生命科学研究所特任教員。13年に鶴岡高専物質工学科准教授。24年に同創造工学科教授。25年から副校長、地域連携センター長。研究テーマは環境の未培養微生物の探索、食品主原料として利用可能な「納豆菌粉」の開発

地域への愛着と誇りを育む

佐藤 冬はやはり東京や仙台の方が過ごしやすいですね。晴れも多いです。たゞ、人混みの中で生活している圧迫感がなくなつて、ストレスは減つたと思います。平日は満員電車で通勤し、休日に車で出かけようとしても基本渋滞。田舎だつたら数分で行ける距離なのに、東京ではどれだけかかるの? という具合。鶴岡に帰つてくれば緑もあるし、海もあるし、気持ちよく車で走れるし。鶴岡で

石井 経営者の目線でみた時、関東圏に行かないと手に入らないものというと、それは圧倒的に人脈と情報です。仕事をする上で東京事務所を構えようかなと思うぐらい。

— 地元暮らし、今の仕事を通じてこれからどのようなビジョンを持っていますか

原田 今の仕事では、自分が培ってきたITスキルや生産管理の経験を生かして職場の効率化に貢献し、より良くしていきたいと考えています。目の前にあるやるべきことや仕事に対し、与えてくれた人が満足できる成果を出せる人材になれるよう、一步一

の日常が都会では当たり前でなく、仕事に注力するためにも生活する環境は重要だったんだな、とあらためて気付きました。

原田 冬の話が出ましたけ

ど、最近の関東を見ていると夏は暑すぎて住みにくそうですが、庄内の夏も暑いですが、電車通勤がない分、暮らしやすいかもしれないですね。

佐々木 私の場合、地元に不便はありませんね。その場にあることである程度満足できてしまうんです。本当に暇だなつたら休みを取つて旅行に行つたりします。

私は20代から30代前半ぐら

いまでアウトドア、インドア問わず、いろいろな遊びを楽しめます。

私は20代から30代前半ぐら

いまでアウトドア、インドア

問わず、いろいろな遊びを楽しめます。

鶴岡高専Uターンサイト

鶴岡高専卒業生・修了生の地元での再就職をサポートし、地元のものづくり企業の中途採用活動を支援するサ



イト。鶴岡高専の研究開発力の向上と、地元のものづくり企業との連携をバックアップしている鶴岡高専技術振興会(会員企業190社)が2024年度から運営している。

鶴岡高専 OB・OGと同会会員企業がユーザー登録することができ、企業求人と求職者情報の閲覧、検索が可能。

スカウト機能を活用することで、自身を求職者リストに表示させてアピールできるほか、企業側からチャットで直接コンタクトを取ることもできる。

サイトの二次元コード▶



私のこれからへの展望について。まず会社としては、これから社員の待遇改善を進めたい。従業員のみんなには苦労をかけたんですよ。父が亡くなり、工場が火災になつて。立て直したと思ったらコロナ禍。米価が下がつて離農が増える事態になつたと思ったら昨年は高騰しました。当社の農機関連事業としては利益を出せる態勢に持つてこれているので、いよいよ従業員に還

歩取り組んでいきたいと思います。
佐藤 私は鶴岡高専の教員として、世界に通用する技術者を育成することと、人間力をしつかり身に付けてもらうというところをがんばりたいと思っています。前職で採用や若手の育成に携わっていた際に、新卒採用者や学生の特性が、これまでとは少し異なつてきているなど感じています。実際に、新卒採用者や学生の特性が、これまでとは少し異なるなど感じていました。どれだけ高い技術力があつても、互いに協力し合い信頼を築こうとする姿勢がないことはできません。そのためにも、私は技術力のほか人間力も在学中に高めることができることで、可能性をさらに切り拓くことにつながり、振

り返った際に「鶴岡高専で良かった」と思ってもらえるよう、研究・教育活動に取り組んでいきます。
佐々木 今勤めているフルメクテスはスタートアップの企業で、けつこう少数精銳な部分があつて。いろいろな業務を兼任している部分があり、人材を求めています。社会経験があつたり、技能や技術を持つている人がUターンやIターンの形で入ってくれるとありがたいですし、関心のある方がいれば積極的に触れ合える機会を持ちたいです。自身では会社の発展にいっそう貢献したいと思います。これから進学、就職する方々には、若いうちにより多くのことを学び、経験し、吸

り、自分の成長につなげてもらいたいですね。

石井 自分が学んできたこ

と、やつてきたことがどこでどんな形で生きてくるのかは分かりませんからね。あの時は全然意識していなかつたけれども、今思うとやつておいて良かった、ということがあります。年齢を重ねた今になると感じます。

私のこれからへの展望について。まず会社としては、これから社員の待遇改善を進めたい。従業員のみんなには苦労をかけたんですよ。父が亡くなり、工場が火災になつて。立て直したと思ったらコロナ禍。米価が下がつて離農が増える事態になつたと思ったら昨年は高騰しました。当社の農機関連事業としては利益を出せる態勢に持つてこれているので、いよいよ従業員に還



母校の教壇に立つ佐藤さん
前職での若手育成の経験も生きている



秋田の釣り堀にて息子と初めての釣り。
この日は8匹も釣れました